第317回

この冬特異な動きをみせる野菜類

11月の中旬までそれほどの寒さではなかったが、下旬から12月にかけて全国を大寒波が襲った。「暖をとる」料理として、鍋物をする家庭が増える。ところが輸入も円安で動きに活況がみられない。供給面が抑制されて需要が例年を上回れば、必然的に卸売単価は高くなる。今冬は入荷減に対する単価の反応が結構極端である。同じ高値でも、それが厳冬要因だけなのか他の理由があるのか、観察してみる。

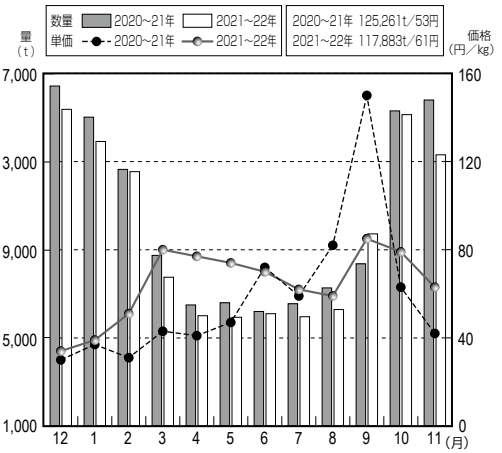
ハクサイ

需要復活も茨城産減で和歌山・兵庫入荷の異常

【概況】東京市場におけるハクサイは、11月には16％ほどの入荷減に対して単価は49％も高騰。12月も20日に至るも入荷は前年同月比で15％少なく、単価も23％高い。21年の同じ時期をみると、3％減で19％高だから、寒いときは鍋需要からの引きが強いハクサイには平均値かもしれない。この時期に9割を占める茨城産が前年比で17％少ないために、急遽、和歌山や兵庫などからの緊急出荷がみられるが、茨城主導の相場にはあまり効果がない。

【背景】主産地・茨城のハクサイカレンダーをみると、秋は11月から急激な増加を見せ、年明けは3月にかけて緩やかに減ってきている。3～5月は横ばいで推移し、夏は極端に減るが、秋も深まる10月ごろから増えて、ピークは12月。ハイシーズンは群馬や埼玉が補完役だが、緊急時には近畿の主産地、淡路島や和歌山からも入荷する。関西市場向けから振り分けられるため、主産地茨城を地場に持つ東京市場の高値推移は、関西市場まで影響を与えることになる。

【今後の推移】関西マーケット分が東京に引かれるのは、やはり異常事態だ。ひとつは寒波襲来で、今シーズンは家庭用はもちろん、業務用需要がとくに強い。また、22年冬の時点ではまだ生産・出荷のための労働力が不足していたこともある。関東では実習生が最も多い茨城には辛いシーズンだ。伝統的に茨城のハクサイ農家は、数年に1回はある品薄・高騰のタイミングを外さない。常にやや多めに作り、畑での囲いや冷蔵貯蔵などによって出荷調整し、相場操作する場合もある。



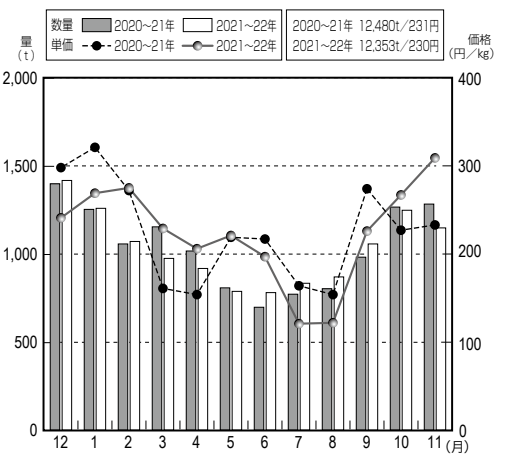
エノキダケ

1割の入荷減で3割高に　寒いと売れる人気のキノコ

【概況】東京市場における11月のエノキダケは、11％減った程度で単価は32％高く、12月中旬時点でも基調は変わらず、10％の入荷減で35％高かった。21年の同時期では入荷量、単価は安定していたから、今シーズンは特徴ある動きをみせている。エノキはこの時期には主産地・長野が64％程度のシェア、続いて新潟が27％で今シーズンもほぼ同じながら、普段は来ない福岡産や宮城産が入荷している。シイタケは2割近く減っているが単価は15％高いだけだ。

【背景】エノキダケの動向は、ハクサイの事情とほぼ同じだ。寒波襲来で家庭でも鍋物が増えているし、忘年会需要が復活気味で引きが強い。ほとんどの菌茸類はいま人工栽培、いわゆる工業生産で生産調整が可能であるが、ただし植菌から出荷まで2カ月以上かかるため、急な需要の変化には即対応できない。寒波襲来はかなり突然だったので、供給が増えるのは年明け以降だ。鍋物に使われる野菜類のうち、かつてシイタケが占めていた地位は、いまやエノキの指定席になった。

【今後の推移】いまや菌茸類のトップを行くエノキは、調理は簡便で食感も良く、どんな料理にも使えるうえに、機能性も高い。完全に人工栽培された初めてのキノコ類であり、生産技術が最も安定し供給もコンスタントである。価格も30年前から比べると半値になっている。この3年にわたるコロナ禍にあって、家族の団欒の象徴でもある鍋物は、冬の定番料理として以前に増して頻度も上がっている。また用途としては和洋中の麺類との相性もいい。寒さが来るとまず買うキノコになった。



今年の市場相場を読む

流通
ジャーナリスト
小林 彰一

青果物など農産物流通が専門。㈱農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オピニオン情報紙『新感性』、月刊『農林リサーチ』を発行。著書に『日本を襲う外国青果物』『レポート青果物の市場外流通』『野菜のおいしさランキング』などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。

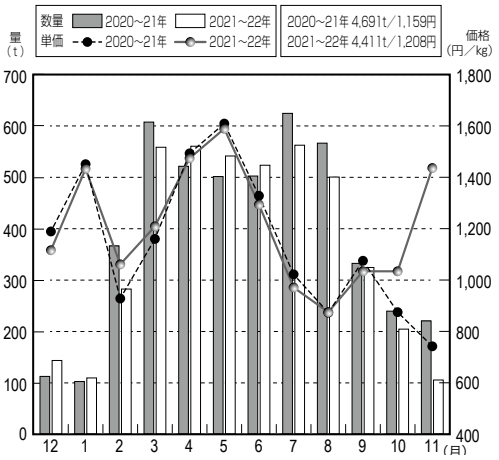
アスパラガス

メキシコ産半減の異常事態に　冬期の国産化も課題

【概況】東京市場の11月のアスパラの入荷量は、前年比48％と半減、単価は198％とほぼ2倍になった。12月中旬になっても数量64％で単価は132％。状況は改善しない。この時期は、80％がメキシコ産でオーストラリアが17％とほぼ輸入品で占められる。最近ではTPP効果でペルー産も入荷している。国産は残る1％だけで、しっかり加温した高単価、超促成栽培。ただし今シーズンのメキシコ産は寒波の影響で大不作になった。

【背景】前シーズンでは、11月から1月まではメキシコ産が中心で入荷し、九州産が増え出す2月には輸入物が減っていくのが近年のパターンであった。しかし今シーズンのメキシコ産は、かなり深刻な冷害の打撃を受けているといわれ、出荷遅れを取り戻す前に、日本では国産がスタートすることになりそう。メキシコ産の減少をカバーするのはオーストラリア産だが、近年、とくに秋から冬にかけて佐賀、長崎など九州産が増えたことで、輸出仕向けが大幅に減っている。

【今後の推移】アスパラはこのままだと、年明け1～2月ごろまで品薄、高値状態が続くものとみられる。日本を襲っている寒波の影響ではないものの、この冬における寒波は世界レベルで共通する天候異変に原因があるといえそう。そこに円安という高値要因が加わる。工業製品もそうだが、野菜も中国などに一方的に頼るリスクが指摘されるようになってきた。国産の不足分は輸入品で、という短絡な対応ではなく、アスパラでも、国内での完全な周年産地リレー作りは不可能ではない。



カボチャ

メキシコは不作、NZ産は減産見込み　春まで不安定か

【概況】東京市場の11月のカボチャは、入荷数量で81％、単価は133％。本来は潤沢に出回るはずの時期に少なくて高い。主産地・北海道産がピークを迎えたものの、本来は増えてくるはずの次の産地、メキシコ産の入荷が前年比20％で単価は161％と高くなったからだ。北海道産は10月に前倒し気味に出荷を増やしたが、小玉傾向で前年より1割程度少なかったことと、メキシコ産が寒波の影響で作柄が悪かったことなどが重なったためである。

【背景】この傾向が12月中旬になっても数量92％、単価119％と後を引いている。北海道産の切上がりが早かったために数量90％、単価110％、メキシコ産は数量99％と戻したが円安がらみで単価は140％と高い。全体に高めの相場感があるのは、平均単価が2割は高い国産の初物に当たる鹿児島産が出てきて、シェアはメキシコ産、北海道産に次ぐ26％を占めているからだ。ちなみに、鹿児島産より早いはずの沖縄産が出てこないのは、契約栽培の比率が高いためか。

【今後の推移】23年明けからの流れを考えるうえで参照したいのが、21年と22年の2月の状況だ。22年2月の入荷シェアをみると、1位が前年の24％から48％に倍増したメキシコ、前年65％でトップだったニュージーランドは大幅減の37％で2位に、3位が8％から12％に増やした沖縄産だ。ニュージーランドはSDGsがらみで生産そのものが縮小するというから、今シーズンもさらに減るとの見通し。メキシコ産は寒波のために不作。国産が増えてくる春以降まで、高め推移か。

